

回覧されました。当時、日本と中国との間には交流がありませんでしたので、私たちはこれらを通じて初めて、中国の香りに触れ、文化の肌触りを実感したのですが、授業そのものは、沈黙の多い、怖ろしいものでした。

その一方で先生は、厳しい学者の顔の陰に、愛情こまやかな、母親のような顔を潜ませておりました。論文の締切りを前にして必死の学生に、ご自身手作りの食事を与えられた、というのがそれで、この事件のあと、研究室では、「伊藤先生は過保護である」との評判が定着しました。そしてもう一つ、未完成のレポートを出した学生に、六年も経過したあとで、あのレポートを完成させよと命じられた事件。

先生は沈黙の中で学生を見つめ、静かに、そして懸命に学生を育てようとしておられたのだと思います。先生は書を愛し、書物を大事にされましたが、それに劣らず、人を愛し、人と人とのつながりを大切にされました。増田渉氏とのご縁によって、魯迅の孫弟子であることを誇りにされ、旧制一高時代の師弟関係によって、漱石の孫

の気持ちをお伝えしたいと思います。

漱平先生、有難うございました。先生とのご縁は、これからも続きます。

二〇〇九年十二月二十六日

弟子であるとも称された先生は、自らを「出不精、引つ込み思案」としながら、その学問によって、日本はもとより、中国や欧米の学者とも深い絆を結ばれ、いつしか華やかな舞台の中央に立つておられました。

昨春秋、先生の著作集第三巻の刊行を祝って、出版社の方や、編集・校正に携わった弟子たちが、先生のご近所の店に集まりました。先生は上機嫌で、禁じられていたはずのお酒をも口にしてしまわれました。私たちはそれを喜び、酔いに任せてお宅にまで押しかける騒ぎとなりましたが、先生はその直後、救急車で運ばれたと、あとで知りました。無理を承知の破戒でした。

初めてお会いして以来、私は先生の学生であることを誇りとして参りましたが、一方では、不肖の弟子として先生の世界から遠ざかり、反抗にもならぬ反抗を重ねてきました。しかし現在、私は先生のご著書の出版に関わる中で、まともに先生に向き合ねばならぬと痛感するようになりました。本当のお礼は、まだまだ先ですが、先生の旅立ちに際して、多くの学生たちとともに、感謝

弔 辞

大木 康

「桃李滿天下（桃李天下に満つ）」という言葉があまります。多くの教え子が広く各地にいることをいう言葉です。先生は教職にあつての長いご経歴を通じて、まさしく「桃李滿天下」、多くの学生を育ててこられました。もっともたよりない学生であるわたくしが、多くの受業生の代表の一人として、ここにお別れの言葉を述べさせていただきます。先生、どうかお許しください。

別れない出会いはない。そのことはわかっているが、とうとうお別れの日が来てしまったのですね。

忘れもいたしません。一九七八年十月三十一日の第二限、場所は駒場の七号館七〇四番教室でのことでした。その日、その場所で、わたくしははじめて先生にお目にかかったのです。この年の冬学期、先生はいわゆる駒場の持ち出し講義として「中国文学史概説」を担当され、

「駒場へ出講されたのでした。わたくしは駒場の二年生として、翌年の中国文学科への進学が決まっております。駒場で中国語を教えていただいた伝田章先生から、「伊藤先生はたいへんな学問をお持ちだから、しっかりとついて勉強するように」と言われておりました。教室の扉を開けて入ってこられたのは、ダブルの背広、ベレー帽をかぶり、本がいつぱいつまった大きな鞆を両手に持たれた、とてもダンディーで、とても大きな先生でした。

この時の先生のご講義は、中国文学史についての著述を検討するという授業でした。現在、「文学史の書き直し」と称して、過去の中国文学史についての研究が盛んに行われておりますが、先生のご講義は、まさしくその方向を、しかも当たり前のごとく、先取りされたものでありました。

先生は、世界中で書かれた中国文学史の書物を一つ一つ紹介し、その作者と特徴とについて論じながら、大きな鞆につめて持ってこられたその実物を、学生に回覧してくださいました。書物は、確固として存在する「物」

た。大の食通でもいらつしゃいました。

一身にして、これだけの幅広いご趣味と深い造詣とをお持ちであった先生は、まったく超人です。わたくしはその一部分、しかもきわめて皮相なところで、先生のまねをさせていただくことしかできません。先生はいついつまでも、わたくしにとつての遙か彼方の理想なのです。

先生、突然ですが、ここで一つご報告があります。昨日、北京大学の潘建国先生からお便りをいただきました。それは、北京大学からまもなく発刊予定の『国際漢学研究通訊』の創刊号に、伊藤先生の特集コーナーを設けたので、協力してほしい、というお便りでした。先生の著作目録の提供その他、つつしんで協力させていただきたいと思います。

先生、先生御逝去のニュースは、いま世界中を駆けめぐっていますよ。

先生が生涯をかけてお集めになったご蔵書のうち、『紅樓夢』と李漁に関する部分を、東洋文化研究所にお譲りいただき、現在「両紅軒文庫」として所蔵させてい

である、色と形、大きさ、重さ、手触り、そして香りをも持った物であること、さらに、必要な書物は、その関連のものも含めて、自分で買って持っていなければならぬということ、ごく自然な形でお教えたいただいたです。

この最初の授業を通じて、わたくしは先生のスタイルにすっかりあこがれ、それを少しでもまねさせていたただくこと、それが人生の一つの目標になったのです。

授業に関する思い出は限りがありません。学生はわたくし一人だけ、先生を独占させていただいた、そんな限りない贅沢も一度ならずさせていただきました。

先生のご研究は、きわめて緻密で実証的、そして一方では研究室運営や大学行政にも手腕を発揮された先生ですが、先生の生き方、そのスタイルは、真に優雅な文人のスタイルだったのだと思います。味わい深い『紅樓夢』の訳文はいうまでもなく、ものされる散文、長歌、短歌、旋頭歌、俳句、漢詩、書、お香、お茶、そして謡。先生はわたくしの結婚式で、「高砂」を謡ってくださいまし

ただいております。なかには、日本に一つしかない「紅樓夢」程甲本、世界に一つしかない『嬌紅記』などの貴重な書物が多く含まれております。早くも雑誌『汲古』の最新号には、先生ご所蔵の『紅樓夢』の版本を用いた研究成果が掲載されています。先生の生涯のご努力の結晶でもある「両紅軒文庫」を末永くお守りしてゆくことを、わたくしはここにお願い申し上げます。

伊藤先生、天国に赴かれ、もう委細を尽くした長い電話をお受けすることも、あの達筆のお手紙をいただくこともできないのかと思うと、さびしい限りです。でも、先生はいつまでも、いつまでもわたくしたちの遙かな理想です。いつまでも心の中のお手本として、わたくしたちをお導きいただきたいと思えます。先生のお教えにそむくことのないよう、つとめはげんで参りたいと思えます。

伊藤先生、ほんとうにありがとうございました。安らかにやすみください。